

『吉田松陰の教え―』

人は何のために学ぶか』



NPO法人桃李塾塾長
人間環境大学名誉教授

かわぐち まさあき
川口雅昭氏

大学教授になる以前は山口県の高校教員として本気の教育を実践。その後、人間環境大学・皇学館大学の教授として吉田松陰研究や将来教員を目指す学生を中心に指導・育成に長年尽力した。吉田松陰の日本屈指の研究者。『吉田松陰先生名辞』(登龍館)、『吉田松陰一日一言』(致知出版社)、『吉田松陰』(致知出版社)などご著書多数。本文は二〇二〇年十一月のご講演より。

てんせい
点醒こそ教師の最大の資質

私は二十七歳で山口県の県立高校の教員として働くことになりました。最初の五年は進学校でした。その後、当時山口県下で一、二を争うほど勉強ができない学校と言われたM高校に赴任することになりました。そこでは、いきなり三年生の担任をすることになったのですが、進学校での経験が一切通用しませんでした。

一学期は前任校の四分の一の進度でやったのですが、ほとんどの生徒が分からないと言うのです。

それで二学期になって八分の一の進度にしたのです。そうするとやつと半分の生徒が、「わかるようになった」と言いました。

私はやりがいを感じられず、問題ばかりを起こす彼らが早く卒業してくれることを願って過ごしていたのです。

ようやく卒業式の日を迎え、彼らが帰った後で教室に行くと、彼らは全員、生徒用のロッカーに油性ペンで好きな女の子や男の子の名前を書いていたのです。私は一人、誰もいなくなった教室でその落書きを消しましたが、その時初めて涙がこぼれたのです。「俺はこんな勉強のできない子たちを教えるために教員になったのではない」と思いながら。

ところが、知人が電話をしてきて、「お前みたいな奴がよくM高校で一年耐えたなあ。生徒は本当に馬鹿だったんだろう」と言ったものだから、あの時初めて火がつきました。自分が担任をしている生徒が馬鹿と呼ばわりされて、そうだとする教員があるか！と。

それで当時、M君という全然やる気がない生徒がいました。ちょうどその頃、私の高校の時の恩師が下関の超進学校の校長をしておりましたので、

「こういうやる気のない子どもはどう指導したらよいのでしょうか」

と相談をしたのです。すると、

「一回連れてきなさい」

と言われました。それで、M君を半分だまして連れていきました。彼は最初、大変ふてくされました。しかし、そのまま恩師のいる校長室へ入ったのです。すると、恩師は、

「いやー、こんな川口みたいなのが担任で大変でしたね」とM君に話し始めました。そこからたった二十分。M君は私がそれまでに見たことがないような目つきに変わり、明らかにやる気その目に現れていたのです。

私はこれが吉田松陰が言っていた『點醒（てんせい）』であるのかと思いました。この點醒というのは、その人と会うだけで己を恥じて、まともな生き方をしようという気持ちにさせてくれるような人徳のことをいいます。教員はこういう資質を持たなければならぬと思いました。

その後、気持ちに火がついたM君は、結局、M高校から二十数年ぶりに国立大学に進学するという快挙を成し遂げたのです。

私が実践した松陰の教育方法

また、ある年にN君という非常に成績のよい生徒が入学してきました。実は中学時代の彼の成績を見ると、他の進学校にも入学ができるほどの成績でした。それで、彼の可能性を確信したのです。

それで、私は宿泊施設をお借りして、学習合宿をやることにしたのです。学年の百二十人の生徒のうち、約九十人が参加しました。まずは、勉強のやり方を教えました。

「勉強の方法なんて、学校が違ったとしても変わらんのよ。魔法の方法なんてないんよ。勉強っていうのは、分からんことを自分が分かるようにすることだ。これを積み重ねていく以外にやり方なんてない！」と言いました。

また、自信を持たせてくれて、早稲田大学の過去問題の中で一番簡単な問題をやらせてみたのですが、ある生徒が、「なんだ、早稲田ってこの程度か」と口にしたことは今も覚えていています。

さて、私は松陰の教育を参考にし、「これだと思うことを実践しました。」

まず、生徒たちに常々話したことは、「一科目で良い。これが好きだという科目があったら、体育でもない。徹底的にそれに本気になれ」ということでした。これは、数学者の広中平祐さんの『学問の発見』という本でも同じようなことが書かれていました。

「自分で直接興味関心がないことは忘れていくけれども、自分の興味関心があることについては必ず知恵として残る。そして、それが人生というもの開くのだ」と。

次に、生徒たちに話したのは、

「自分で勉強して、ここまでは分かったのですけれども、ここからが分かりませんが、という時は職員室に来なさい」ということでした。このことを松陰は自己教育と言っています。

さらに、生徒たちに対して、

「勉強の目的というのは自分の心を鍛えるためなんだ。吉田松陰は『学は、人たる所以を学ぶなり』と言っている。学問は、人間というのはどういうものか、どうやって生きるのがその辺の犬や猫と違う生き方であるのかを学ぶというのが勉強の目的なんだ」

というようなことをよく語りました。

松陰の勉強に対するやる気の高め方

松陰は下田事件を安政元年三月二十七日に起こして、幕府から今で言う自宅謹慎を言い渡され、萩に帰ってくるのです。その時に、長州藩は幕府を怖がって松陰を牢屋に閉じ込めました。

松陰は当時、日米和親条約がアメリカ海軍に対して戦う能力が無くて、仕方なく結ばされたものであることを既に分かっていました。そして、一番問題なのは、この不平等な条約を誰もおかしいと思っていないということが問題なのだと考えていたのです。それで、このことを同じ囚人たちに語りかけるわけです。そうしたら、半年ほど後に、「そんなに今、日本という国は困っているのか。では、まず私たちに『孟子』という授業をしてくれ」

と他の囚人たちに言わしめているわけです。

皆さんの中で教員をしておられる方の中で、今までに生徒から、「俺たちにこんな授業してほしい」と言われたことがありますか。私は残念ながら一回もありません。私は松陰がどうやってそのように言わしめたのだらうかと考え、調べてみたのですが、こういうことがわかりました

そのとき、共に牢屋に入っていた十一人の囚人の中に、習字の得意な河野と、俳句の得意な吉村という二人がいたのです。それで、松陰はこの二人に、

「先生！教えてほしい」と言って近づいたのです。そうすると、人間というのは元来教えたがりという特性があるのでしょうか。彼らは次第にその気になっていったのです。それを見ていた他の九人は、最初は反発しました。

しかし、松陰は構わずに河野と吉村の二人のレベルを上げていくことに集中しました。すると、次第

に他の者たちのレベルも上がっていったのです。

私はこのことを参考にして、先程のN君と合宿のときに「早稲田ってこの程度か」と言ったT君の二人を徹底的に鍛えることにしたのです。そうすると、あのM高校の生徒全体のレベルが次第に上がったのです。

生徒たちが勉強に本気になった

そんな彼らが三年生になったある日、私は職員室で昼飯を食べていたら、副担任の先生が飛んできました。

「先生！うちのクラス大変ですよ」

私はまた何か問題を起こしたのかなと思って二階に上がったのです。さすがに目を疑いました。

山口県内で一、二を争う勉強のできないと言われていたうちの生徒たちが、昼飯を食べた後全員が勉強をしていたのです。本当にあのときは涙が出ました。

こうして彼らは受験の季節を迎えたのですが、N君は二十数年ぶりに広島大学に通りました。腰が抜けました。本当に嬉しかったです。

そのN君は、恰好をつけてお礼の挨拶に来るわけです。そして、

「何か言葉を書いてください」

と言うものですから、私はその辺にあったザラ版紙を取り出して、
“ばかは勉強せい”と書いて

やったのです。

何年か経って、私は彼の結婚式に呼ばれました。そのとき、茶色に変色してしまつたそのザラ版紙をお母さんが持つてきていて、それを見せながら、「あの子は大学院を出るまでその紙をずっと勉強机の前に貼っていました」と言ってくれたのです。

私は泣きました。もつとまともな紙に書いてあげたらよかつたと思ひました。でも、想いが伝わつていたので、それでよかつたのかなと思ひました。それから、「早稲田つてこの程度か」と口にしたT君は山口大学に行つてくれました。他にも有名と言われる大学に何人も合格してくれました。でもそんなことより、最も心に残つたことがありました。

実は、Iさんという女生徒がいたのですが、高等専門学校に十校以上も受験をしたのに全て落ちてしまいました。どれだけやつても思うように成績が伸びなかつたのです。それで私は卒業式の時に彼女に謝りました。

「合格をさせてあげられなくてすまんかつたな」と。

するとあの子は、こう言つたのです。

「そんなことありません。先生のおかげで、なぜ勉強しなければいけないのかが分かりました。それから、先生と出会つて私が毎晩六時間勉強できるような人間になれたということが信じられません」

この子が毎日六時間も勉強やつていたことをそのとき初めて知りました。彼女は今年賀状送つてきてくれますが、山口の病院で看護師として地元の人たちのためにがんばつてくれていきます。

教師の姿こそ最高の教育

何年も前に、慶應義塾大学名誉教授の中村 勝範先生という憧れの先生と対談をさせてもらうことがありました。

そのとき、中村先生はゼミ旅行で山口県の萩に行き、松陰が生まれた旧宅の裏山に『吉田松陰先生誕生地跡』と書かれた石碑を見て、三十分泣いたという話をされたのです。

実は、吉田 松陰の門下生の中でも威張り屋だった山縣 有朋が内閣総理大臣を辞めたあと、あの石碑を建てたのです。しかし、そこには「門下生」という三文字しか書いていないのです。

中村先生はこう話してくださいました。「私は、総理大臣にまでなった山縣 有朋が、「門下生」とだけ書いて残した文字を見て、山縣がどれだけ吉田 松陰のことを恩師として想っていたのかを感じました。と同時に、私が小学六年生のときの担任のことが思い出されて涙が止まらなかったのです」と。

さらに、

「実は私は、長野県の松本郊外の水呑百姓の家の出身なのです。小学六年生のときに、校長先生と担任が来られて、私を松本中学校に行かせてやってほしいと両親に頼みに来てくれたことがありました。しかし、父は、『そんなお金はない』と言いました。

すると、校長先生と担任が、『いつか偉くなったら返してくれたらいいです』と頼んでくれたのです。あのときは、村中の笑い者でした。初めて自転車というものを買ってもらって、中学に通えるようになったのです。あの担任の先生がいなければ今の私はありません」

と話されたのです。

さて、そんな中村先生が、

「松下村塾で一番勉強したのは誰か」という質問をされました。私は、

「当然、吉田松陰です」

とお答えしましたが、大変納得されていました。そして、

「高杉も久坂もみんな門下生たちは、おそらく吉田松陰になりたかったんですね」と言われました。さらに、

「川口先生がM高校のときに、全く勉強しなかった生徒たちが本気になりはじめたのは、きっと川口先生みたくになりたかったんですよ」と言っていたのです。

それを聞いて私は思い出しました。

実はあの三年生の卒業式のあと、問題児の一人だったKくんが仲間をひきつれて学校に戻って来たのです。それで一瞬、「いよいよお礼参りか」と思いました。ところが、「世話になったし…」と言って小さな箱を渡してくれたのです。開けてみるとパーカーの万年筆が入っていました。そして、彼は三年間いつも他校に対してコンプレックスを感じていたことを話し始めました。でも最後にこんなことを言ってくれたのです。

「でも、俺たちはここに来てよかった。秋になったら学会に行くって言いながら目を真っ赤にして勉強をしていた川口先生が担任だったのが自慢でした。他の進学校の担任よりも俺たちの担任の方が偉いんだというのが誇りでした」

これを聞いて、涙で彼らの姿が見えなくなりました。

子どものやる気を高める一番簡単な方法は、親や教師が勉強をする姿を見せることだということをおぼらから教えられたのです。

私は先生と言われる方々には、何でもいいから、自分の生きる姿を見せることをしてほしいんです。それが子どもたちに一番大きな影響を与えると思うのです。吉田 松陰も、中村先生の小学校のときの担任の先生も、まさにそんな先生だったのだらうと思います。

今、学校の先生方に伝えたいこと

松陰は性善説をとっているので、

「心というのは本来素直でいいものなんだ。しかし、目とか花とか食感とか、肉体の誘惑によって私たちは世俗的な欲にとらわれがちである。だから、本来の善なる心を取り戻すために、学問というのは良いんだ」

と彼は言っているのです。

しかし、今の時代、他人と比較して、学力で競争しようとする大人も子どもも多いです。人間は若いうちは自分を客観的に見られないですよ。どうしても焦るんです。それで、ただ単に学力で競争して進学先を選び、就職先を選んで自分に似合わない世界に行ってしまう人が多い…。これでは何にもならないと思います。

だからこそ、学校の先生方には松陰が、「学は、人たる所以を学ぶなり」と言っているように、勉強は何のためにするのか、ということ子どもたちにぜひ伝えてあげてほしいと思うのです。

それぞれの伝え方があると思いますが、私の場合は自分の子どもには、

「いい大学に行かなくてもいい。人からいい人だと言われなくてもいい。ただ、社会に出たときに、お前がいてくれないと困る、という人間になってくれ」とずっと話してきました。

それからもう一つ、先生方にお聞きしたいことがあります。

「自分が担任をしているとき、自分がその学校で教えているときに『何とかせないかん』と思っていますか」

実は、私はM高校の教員時代にそういう思い上がりがあつて恩師からどやしつけられました。

「お前は、いつそんなに偉くなったのだ。お前が手をかけた子が全てよくなるのであれば、学校の教員ほど楽な商売があるか！」と。

しかし、こう言われました。

「その代わり、いったん関わりを持った生徒なら、その子のことを死ぬまで手をかけてやれ。三十年先、四十年先に『先生が言ったことがようやく分かった』と言ってくれたらいいだろう」と。

教師は教えこもうとするのではなく、真剣に生徒を愛することをすればよいのです。今では、私の教え子で教員をやっている、相談にくる子には恩師と同じことを言っています。

どの人にも天命が必ず待っている

私の教え子ですが、ある有名大学に行き、有名企業に入社した男がいます。彼が五十歳になるかどうかという頃に、一緒に飲みました。その時、彼は重役に就き、年収は二千五百万円ほどでした。

そんな彼は私に、高校三年の時に東京大学に入れなかった未練が未だにあると話してきたのです。彼は東大に進み、その後、中央官庁で審議官とか補佐官になった人が羨ましくて、仕方ないんです。それで、彼に、「今、何が楽しいのか？」と聞いたら、「部下と会社が終わってから行くカラオケです」と言ったのです。

一瞬殴つてやろうかと思いました。彼が今、何を糧に生きているか想像できませんよね。肩書きだけです。彼は定年したら終わりですよ。私は三十年前担任をしていたことを恥じました。教えておいてやればよかったんです。

「人間というのは天命がある。お前はここで生きろ！つていう天の配慮があるんだよ」と。

今、大河ドラマでやっている西郷という人物も私は好きなのですが、なぜ、西郷は偉いのか分かりませんか。

そうです、通算五年間の島流しです。

「苦勞は買つてでもせい」という言葉がありますが、あれは嘘ですよ。自分が意図的に買つてやるような苦勞では人間は成長しません。「なんで俺がこんな職場に勤務せないかんのじゃ」「なんで、私がこんな目に合わなければならんのや」という場面が人生で必ずあるのです。これが天の配慮なんです。それを能動的に捉えられるか、否定的に捉えるかで、その人が一流になるか、三流になるかが決ま

るのです。

だから、心配している学生にはよく言うんです。「心配するな、お前じゃなければならぬ、という世界が待っていてくれるから…、焦るなよ」と。

最後になりますが、私は先生方に心ある、まともな人間を一人でも育てていただきたいのです。それを教育の目的にしてもらいたいです。子どもが一番感動するのは生の先生なんです。

「わしも勉強できんかったんよ」

と言ってやってください。そして、心根のいい子を褒めてやってほしいんです。百六十年前に松陰が言っているように。